

# 地域に定住する日本語学習者の言語生活に関する縦断的研究

## —OPI テストを活用した会話データからみえてきたこと—

企画責任者 野山 広 (国立国語研究所)

### 1. ワークショップの趣旨

国立国語研究所日本語教育基盤情報センター（整備普及グループ）では、日本語・日本語教育研究の充実、共同研究、連携・協働活動の拡充等を目標に、日本語教育データベースの構築を行ってきた。このデータベース作りの背景には、海外から移住してきた地域の定住者（日本語非母語話者）の増加や、その増加に伴う、定住外国人の言語環境整備促進の必要性等がある。センターでは、これまで、基盤情報の一つとして、OPI (Oral Proficiency Interview) という、全米外国語教育協会 (ACTFL) が開発した、口頭能力をインタビューで測定する方法を活用した日本語学習者会話データの収集、整備を行ってきた。このプロジェクトでは、多数 (300 人以上) の横断 (異なる対象者を大量に調査した) データとともに、少数 (20 数名) の縦断 (同一の対象者を定期的に調査した) データも収集した。このワークショップでは、「縦断調査」で収集したデータからみえてきたことを中心に発表・報告する。

### 2. 調査内容、基本姿勢、結果の概要

調査は、2008年2月と2009年2月に、A県B町周辺に居住し主としてE校に在学する (在学した) 高校生の日本語学習者 (約10名) を対象に、また、2007年9月と2008年3月及び2008年9月と2009年3月に、C県D市周辺に居住する外国人配偶者を中心とする日本語学習者 (約10名) を対象に実施した。

ここでは、この調査で得られたOPIの録音データ (約30分×20×2=約1200分) や文字化資料 (日本語学習者会話データ) に見られる言語的特徴や、話題の特徴、地域での言語生活や学習環境がもたらす方略 (有効・適切と考えられる会話方法や工夫)、母語話者 (OPIのテスト) や非母語話者 (学習者) の会話の傾向などからみえてきたことについて紹介する。

これまでの非母語話者の言語運用能力に焦点を当てた研究では、日本語使用者 (学習者) の日本語運用能力の正確な把握のために、彼らの言語生活や環境を広く考慮することが重要であることが指摘されている (松尾2000)。また、OPIテストの被験者に、判定結果

を伝えるだけでなく、できる限り学習の参考になるようなコメントをフィードバックすることや、課題について伝えることの重要性も指摘されている (堀井1998)。そこで、発表者たちは、こうした指摘を踏まえ、地域における日本語学習者の言語生活について可能な限り把握し、OPIの結果を現場にフィードバックしつつ、学習者や教授者=支援者とつきあい、寄り添っていくという福祉言語学的 (徳川1999) な協働研究の姿勢を維持してきた。換言すれば、地域日本語学習支援の現場により適した教育内容や方法を共に追究・開発できるような形成的評価の姿勢を目指してきた。

会話データからみえてきた特徴としては、以下の点が挙げられる (野山他2008, 2009)。集住地域では、「敬語 (スピーチレベル) の適切な理解の困難さ」や「外国につながる高校生の言語生活・環境、および彼/彼女本人の関心がもたらす語彙や話題の独特さ」などが、また、分散地域では、「言い切りの形の有無 (無い人が多い)」「声真似による引用 (直接話法と省略) の多さ」「地域方言と社会方言の多さ (地域特有のインプットの多さ)」などである。集住地域・分散地域の共通する特徴としては、「地域の言語生活・環境がもたらす話題の展開 (の多さ)」や「形成的評価とフィードバックの作業を現場の関係者と協働で行った結果が、2年目のテスト結果にプラスに反映した」ということである。

### 3. 発表者の役割とワークショップの流れ

前半の80~90分で、野山が調査研究全体のコーディネーター、嶋田がOPIのテスター、籾野及び塚原が学習者の会話データの文字化・整備に関わった者、そして岡部がOPI以外のテストの可能性を探究した者として、それぞれ15分~20分の報告・発表をする。後半の約30分間は質疑・応答、協議ができれば幸いである。

連絡先 野山 広 〒190-8561 東京都立川市緑町10-2 国立国語研究所 wisen@kokken.go.jp

# 地域に定住する日本語学習者へのOPI活用の意義

嶋田和子（イーストウエスト日本語学校）

## 1. はじめに

本発表では、A県B町とC県D市での縦断調査をもとに、定住する日本語学習者に対してOPIが形成的評価としていかに活用されたかについて報告する。調査結果として、多くの学習者が下位レベル1つずつ上がっていること、またレベルとしては前回と同様であるとされた事例においても、地域社会での人間関係に変化が生じるなど、言語生活に変化が見られた。

ACTFL-OPIは明確な判定基準をもとにレベル判定を行う口頭試験であるが、教材・試験開発、教師教育などさまざまな分野での応用の可能性が考えられる。本発表においては、学習者の学びをサポートする形成的評価として活用できることを実証するものとして、事例をあげながら報告したい。

## 2. OPI実施後に行ったこと

OPI実施直後、野山氏による言語生活などに関するヒヤリング、およびテスターによるフォローアップインタビューを行った。後者では、1. OPIで出てきた話題・事柄をさらに深めたり、展開させる、2. フォーマティブ・フィードバックなどを行った。また、30分のOPIによるインタビューを経て、話しやすい雰囲気が生まれたことから、学習者から子育て、地域社会での人間関係、日本語の勉強の仕方など「人生相談的な質問」を受けることも少なくなかった。

さらに、今後の学習を支援するために、後日フィードバックシートを作成し、学習者に送付した。内容は、1. 現在安定してできること、2. 現在不足していると思われること、3. さらに上のレベルに行くには、どうすればよいのか、といったことである。

また、D市の場合には、学習会主宰者と関わりながら、OPI実施後の日本語学習者の変化を見ていった。

## 3. A県B町（集住地域）の高校生の事例

まずA県B町にあるE校に在学する（在学した）高校生を中心にした調査（①2008年2月、②2009年2月）について述べることにする。1回目には12名（うち中学生2名）に対して実施したが、1年後には経済危機のため3名の学習者が帰国したことにより、9名に対して縦断調査を行った。

結果は、9名のうち8名がOPI判定でレベルアップして

おり、うち1名は下位レベル2つのアップであった。また、残り1名は変化なしであった。ここでは2つの事例を紹介することとする。

### 3.1 「課題」を見つけ、次のステップへ

Mは第1回調査時は「上級-下」であり、第2回では「上級-中」となった。高校3年生から大学に入学するといった大きな生活上の変化があったが、ここではMの「気づき」と「自律的な学び」に注目したい。

OPI終了後、敬語ができないことに気づいたMは、何度も本屋で立ち読みをしたり、自らシミュレーションをしながら練習をしたという報告があった。以下は、「他にどんな努力をしたか」という質問に対するMの答えである。

M: やっぱり差をつけたいというか……。よく日本語とポルトガル語しゃべれるとすごいわれるんですけど、でも実際にB町とかこの近所にはたくさんいると思うんです。で、できるだけ将来、日本語とポルトガル語を使って仕事をすると、人と違うってというか、なんか差をつけられるようになりたいと思うようになったんです。

またMは、OPIとの出会いで、自分の日本語で不足している点を把握することができ、また語ることの楽しさ、自分の意見を言うことの重要性、面白さを知ったと言う。

M: 来年もOPI、ありますよね。ぜひやってください。私の成長、先生に見てもらいたいです。こんな気持ち、不思議ですけど、先生に褒められると、なんかすごく嬉しいです。やる気が出てきます。それに、OPIを受ける前は、なんか相手に意味、通じてるから「これで十分」なんて勝手に思っていたんです。

### 3.2 自ら見つけた日本語の練習方法

YはE校に在学する日系ブラジル人子弟であり、第1回調査時は16歳、レベルは「中級-下」であったが、第2回では「中級-中」となった。授業はポルトガル語で行われ、夜間に行われる日本語授業においてYの場合は自習をする形態であり、日本語を話すことはほとんどない状況である。

Yは、第1回OPIを受けた後「どうしてももうまくなりたい」という思いが強くなり、自分で練習方法を考えていった。

Y：誰も日本語話さないから、テレビ見ながら、そのまま真似する。それ何回も何回もしました。発音とか、文とか、そのまま言ってみると、勉強になると思うから。日本語うまくなりたいから。

これは、フォーマティブ・フィードバックやフィードバックシートなどにより、Y自身が気づき、現在の環境の中でできることを考えていった結果であると言える。

#### 4. C県D市（分散地域）の配偶者の事例

次にC県D市周辺の外国人配偶者を中心にした調査（2グループに分け、2007年9月より2009年3月まで実施）について述べることにする。1回目は12名に実施したが、2回目に関しては、1名母親が危篤であるという知らせを受け、韓国に長期一時帰国するという事態が発生したため、彼女を除く11名に対して縦断調査を行った。

また、12名の実施者のうち2名は高校生であることから、ここでは9名の外国人配偶者に関して報告する。

結果は、9名のうち6名がOPI判定でレベルアップしていることが分かった。残り3名は変化なしであった。ここでは2つの事例と、彼女たちを支えてきた学習会の主宰者の変容について述べることにする。

##### 4.1 話し方の変化から「人間関係・生き方の変化」へ

Rは、結婚のため中国からC県に移り住んで10年になる外国人配偶者である。第1回調査時は「上級-下」であり、第2回でも同じレベルであった。しかし、OPIを受けたこと、その後のフォーマティブ・フィードバックなどにより自分自身の話し方の問題点に気づいたのである。

日常生活において日本語力は問題がなく、時には通訳を頼まれるRであったが、周囲からは「とっつきにくい人／なんとなく怖い人」という印象を持たれていた。しかし、第2回OPI実施のためD市を訪れた筆者は複数の学習会支援者から「Rさんはすごく優しくなった。OPIをやってから、変わったんです。付き合いやすくなったし」というコメントをもらったのである。以下、学習会の主宰者Kの言葉を引用する。

K： 以前からRさんの言葉の強さは気になっていました。あの家の嫁さんはきつくて困る」と言われるのが気になって、何度も注意しました。でもいつも「いいんです！これで通じてますから。通訳もやってますから」という返事が返ってきました。

でも、OPIのインタビューを受ける中で、先生の質問の仕方・受け答えから学んだようです。R自身がそう言ってました。本当にOPIで変わりました。周りの人がみんな気づくほどの変化ですよ。

2回目のOPIでは、地域社会で自分が将来どう生きていきたいかについていきいきと語るRであった。

R：先生。今の縫製工場、社長がやめるっていうんで、私がやろうかなって思うんですよ。今すぐじゃないけど、そしたら、人使うし、心理学みたいなんも勉強しなきゃいけないし……。日本語、勉強したいなって思って。難しい本も読まねばいけないし。

筆者はこれまでも多くの外国人配偶者にOPIを実施してきたが、彼女たちがOPIを通して、自らの言葉で自分のことを語り、自分の意見を他者に伝えることの楽しさに気づいた事例に遭遇している。嶋田（2008:70）は、日本人男性と結婚し、日本に暮らすフィリピン女性の例をあげている（OPI実施後のフォローアップインタビュー）。

J：日本に来てもう10年です。私は、日本語でいろんなこと、話します。友だちもいっぱい。子どもの学校の友だちのお母さんとか、近所の人とか。でも、こんな、いろんなこと、話したことありません。自分の考えとか、意見言い合うとか……。今日は、いっぱい話しました。嬉しかったです。私も、こんなに話せるっていうか、話したいっていうか……。だって、そんなことないです。またOPIやりたいです。なんか勇気出てきたんですよ。

##### 4.2 「語ることの楽しさ」から生まれる学習意欲

Eは、9年前に中国人の娘Mを連れて、結婚のためにC県に移り住んだが、当初日本語は全くできなかった。1年後に息子が誕生したが、片言の日本語しかできず、生まれたばかりのわが子の顔を眺めながらただ「かわいい、かわいい」としか言えなかった。それは、これから日本社会で生きていく息子には中国語で話しかけてはいけないという「思い込み」が彼女をそうさせていたのである。その時Eは、自分に日本語力がないことを心から残念に思った。

しかし、Eはやがて日常生活レベルでの日本語には不自由なくなり、積極的に日本語を学ぶこともなく過ぎていった。その結果、第1回調査時は「中級-中」であった。中級とは「自分なりの文を作ることができ、簡単な質問をしたり相手の質問に答えたりすることによって、簡単な会話なら自分で始め、続け、終わらせることができる（OPIマニュアル:32）」レベルである。すなわちサバイバルができるレベルであり、日常生活や身近な状況に対応できる力を持っていると言える。よって、定住外国人配偶者の場合は、このレベルで止まってしまうことが多い。

Eは第2回には「中級-上」となっていた。日本語が伸びたことを褒め、その理由は何が考えられるかについて質問したところ、以下のような答えが返ってきた。

E：なんか、これでできてたから、いいかあって思ったけど、インタビュー受けて、ああ、やっぱりもうちょっと話したいなって。仕事（パート）の時も、回りの人の話、聞いて、ああ、そう言うんだなって。一生懸命話、聞いて、覚えようと思いました。

OPIにおけるインタビューは、Eにとっては日本に来之からの自分自身の言語生活の振り返りになり、日本語で語ることの楽しさを知ったのである。そのことが、「日本社会で生きるのだから」と母語である中国語の使用を極力抑えてきた彼女に自信を取り戻させることになり、Eは自分の将来を積極的に捉えられるようになっていった。

#### 4.3 主宰者Kに見られた変容

Kは実際にOPIを何度も見ることによって次のようなことを考え始めた。1. テスターはなぜ自然な形で、相手の発話を紡ぎながら質問ができるのか、2. 自分の質問は、相手に考えさせたり、発話を引き出すような質問ではなかった、3. インタビューの中でのテスターの発話量の少なさと比べて、自分自身の発話量は非常に多い、などさまざまな気づきがあり、その後の支援の在り方も変わっていった。本発表でKの変容を取り上げたのは、Kは学習者の生活と深く関わっており、またフィードバックシートもK経由で手渡されたからである。

また、Kはフィードバックシートを読んで気づいたこととして以下の3点をあげている。

- (1) OPIのように明確な判定基準があって、それに基づいて日本語力を捉えることは、自分自身の支援の在り方を振り返ることができる。
- (2) 「日本語力」に関して、何が問題であり、どうすれば1つ上のレベルに行けるかということを学習者に提示することができる。
- (3) タスク重視という考え方を自分なりに持っていたが、実行できていなかったことに、OPIを知ることで気づくことができた。

Kは、縦断調査が2年目に入った時点で、自らがOPIテスターになってD市に定住する外国人を支援したいと考え始め、2008年12月には4日間のOPIワークショップを受けるに至ったのである。

### 5. OPIを使った縦断調査をする意味

ここで、地域に定住する日本語学習者に対してOPIを使った縦断調査をする意味について確認しておきたい。

OPIは、口頭能力インタビュー試験であり、評価のため

の1つの手段である。しかし、学習者に「今の力はどのレベルであるか」を知らせることに重点を置いているのではない。判定した結果は知らされるものの、それをもとに次の段階へと導くためにあるのである。無論それは「日本語学習」を必須のもの、強制すべきものと考えているのでは決してない。「どう学んだらよいか分からない」「何となくやっていた」という学びを、より主体的、創造的な学びに変えるために活用するのである。つまり、自律的な学びのための導火線とも言える。

また地域社会で自分を語り、自分の考えを他者に伝えることの楽しさを知ってもらうためでもある。

### 6. まとめ

以上、集住地域B町と、分散地域D市の事例をもとに、形成的評価としてのOPIの活用法などについて述べた。この2つの地域に関しては、さまざまな相違点があるが、「評価」の機会が非常に少ないことは共通項としてあげられる。その中で、OPIを活用することによって、1. 自分自身の力を知ることができる、2. 何が「課題」かが分かる、3. さらに学びたいという意欲が出る、といった効果が表れることが分かった。それは、OPIの持つ次のような特徴に起因すると言える。

- (1) 明確な評価基準があること
- (2) 10段階で日本語力を評価できること
- (3) 相互のやりとりのある、臨機応変で、学習者中心の評価であること(OPIマニュアル:11)

また、OPIの意義とは、自分のことを語り、自分の考えを述べることの楽しさを知ることにもある。牧野(2001:11)は、OPIとは被験者の「人生を取材」することであるとし、それは「その被験者が毎日どのような生活を送っていて、今までどんな人生を過ごしてきたのか、どんなものの見方をする人なのかを、相手に共感を示しながら、かつ相手の気持ちを傷つけずに探るといこと」だと述べている。

今後も、さらに3年目、4年目と縦断調査を続け、学習者とのやり取りの中でOPIの応用の可能性について考えていきたい。

#### 参考文献

- 嶋田和子. (2008). 目指せ、日本語教師力アップ!—OPIでいきいき授業. ひつじ書房
- 牧野成一他. (2001). ACTFL-OPI入門. アルク
- 牧野成一監修. (1999). ACTFL-OPI試験官養成マニュアル (日本語訳) アルク.

連絡先 嶋田和子 〒164-0011 東京都中野区中央 2-36-9 イーストウエスト日本語学校 [сна63945@nifty.com](mailto:сна63945@nifty.com)

# 「日本語会話データベース 縦断調査編」の特徴と紹介

## —学習者会話データをウェブサイトで公開する意義とその活用の可能性—

旗野 智紀 (国立国語研究所)

### 1. はじめに

学術的・実践的研究において、データの収集は効率よく成果をあげるために大きな課題であり続けている。その一つの手段として、コーパス CD-ROM やウェブサイトなどでデータの集積を公開・共有することは、研究の観点の可能性を広げる意味で重要な意義を持っている。

本稿では、「日本語会話データベース 縦断調査編」ウェブサイトの内容に触れながら、その作成者のデータベースに対する姿勢や、その活用方法を紹介する。

### 2. ウェブによるデータの公開

「日本語会話データベース 縦断調査編」は、ウェブ公開により全世界の人々が無料でアクセスできるようになっている。このホームページでは、ユーザーが縦断調査の対象地域（外国人分散地域と集住地域）を選んで、調査1年目と2年目における OPI テスターと学習者の会話データを閲覧することができる。また、簡単な検索システムを使うことで、レベルや性別、職業などの位相ごとに閲覧したいデータを抽出できるようになっている。また、関連する調査や分析・発表例などの資料も提供している。いずれも、コピーやダウンロード等が可能である。

このように縦断調査の成果を広く公開することには、以下の2つの意義があると考えられる。一つは、データの汎用性の向上、また地域日本語教育の実態を広く知ってもらうことである。従来の会話の分析・研究データは、会員登録制であったり有料であったりするために、日本語学・日本語教育学の専門家が自己の調査という目的のためだけに使用できる場合が多かった。しかしながら、ウェブで簡単にリンクを辿りながらデータを閲覧・ダウンロードできることで、他分野の視点から日本語会話を観察する研究者・学生や、地域での日本語の諸活動に携わるボランティアなど、あらゆる主体がデータを活用することが可能となる。近年叫ばれる日本語教育・言語教育の多様化や、領域横断的・協働実践的な研究の在り方を考える際に、これは有意義であるといえる。

もう一つは、広く公開し、専門家以外の人にも使ってもらうことで、今後の研究、教育、地域活動等の在り方を考えるための叩き台にすることである。地域日本語会話の縦断調査の軌跡を、文字化資料やその分析例とともに提示することで、閲覧者が地域生活者としての日本語

学習者の言語生活の実態を知ることができる。これらの資料を、各ユーザーがそれぞれ独自のやり方で活用し、より多様な日本語・言語生活の在り方を考え、それを共有するきっかけを考えることができれば幸いである。

これらの意義を最大限に実現するため、ウェブサイト及び各文字化データ、資料等は、より単純明快な形で示されることが望まれる。ユーザーがそのようなプレーンな状態の資料を閲覧・ダウンロードし、共同研究や実践の課題を探求したり、各自の方法で分析したりすることが期待される。また、今後同じような形式や機能のデータ集積が行われ公開されることが望まれる。

### 3. 各コンテンツの紹介・活用例

以下、より個別的なウェブのコンテンツ・ページの特徴を記す。また、各データをどのように使い、何を読み取ってほしいかという、作成者の意図を示したい。

#### 3.1. 文字化データ

会話の文字化データは、縦断調査に沿って、外国人分散地域1年目、2年目、集住地域1年目、2年目の4つのページから構成される。それぞれについて10~13件の文字化データを公開しており、OPI レイティング（日本語レベル）、性別、出身国、母語、職業、日本滞在期間等の情報を参照し、文字化データを閲覧・ダウンロードできるようにしてある。文字化データは、テキスト形式と PDF 形式の両方で提示している。これは、前者は発展研究等を行う際に加工等がしやすいように、後者は印刷がしやすいように考慮しているためである。

文字化データについては、地域日本語の学習者の会話の談話構造や語彙の使い方などをできる限り見やすく表示するように心がけた。文字化の枠組みもそれに沿う形で調節した。ユーザーが談話データ全体を見渡すことで、学習者が自らの興味に基づいた「語り」の中でどのような話題を選択し、また適切な言語表現を表出しているかの傾向を読み取ることができれば幸いである。

#### 3.2. タグ情報

縦断調査の会話データには、それぞれにタグ情報が付され、クリック1つで閲覧できるようになる。タグ情報には、各地域で行われた学習者へのフォローアップインタビューの結果等が提供される予定なので、文字化データと合わせて参照することで、より学習者の言語生活や

日本語の学習環境がわかるようになるはずである。

### 3.3. 検索システム

「日本語会話データベース 縦断調査編」ウェブサイトでは、縦断調査に加え、タグ情報の無いデータ数十件も補足的に公開する予定である。検索システムを使って、それら全 100 件弱のデータを、地域、レベル、性別、出身国、母語、職業、日本滞在期間などの観点から、データを抽出することができる。

例えば、レベルや母語の観点に沿ってデータを参照し、学習者の談話の傾向を観察することは意味があると思われる。地域日本語教育に携わるユーザーが、レベル別のデータを参考にすることで、学習者のある程度の日本語レベルを判定するという視点を持つことができるかもしれない。学習者の母語によるデータの比較は、形態論や語用論の視座による対照言語学への貢献が考えられる。漢語の多寡や助詞の使用など、文字化データから一定の傾向を観察することができよう。

職業の観点からデータを見てみると、高校生と主婦とでは、語る事が面白い、たくさん語りたい、と考える話題は異なってくるように思われる。それにより、各データ内においてテスターが、どのような例文やロールプレイを提示しているかの傾向を知ることができるだろう。また、日本滞在期間の観点については、滞在期間の長さ＝日本語レベルの高さ、という比例関係が成り立たない例などを感じることができる。これらのデータは、その観察により、テスターや日本語教育に携わる者が、自己開示の苦手な学習者等からうまく談話を引き出す技術を養えるなど、教授者側の能力開発への応用可能性を持っているといえる。

### 3.4. 研究分析例

本研究グループでは、これらのデータのパイロット的研究として、いくつかの大会で成果を発表する機会を持ってきた。音声データの文字化者が気付いた OPI 談話の特徴等が主な内容であるが、その発表資料を、今後データを使って分析する際に参考になるよう公開している。研究分析例としていくつかの観点が考えられる。例えば、ある特定の年の特定の地域におけるデータを横断的に観察することで、方言の影響や使用語彙の分析等を行うことが可能である。また、特定の学習者の 1 年目と 2 年目のデータを比較することで、日本語レベルの変化と言語生活の状況などの相関性を見ることもできるだろう。

本ウェブサイトは、あくまで研究の材料を叩き台として提供することを第一目標としているので、データやタグ情報を使って、語彙分析や談話分析、あるいは福祉言語学的実践研究等、本グループとの共同研究が実現できれば幸いである。もちろん、このデータをもとに、本グループが想定していない独創的な分析が生まれることがあればそれも幸いである。

### 3.5. 追加データ・報告書

前述の通り、本ウェブサイトでは、縦断調査による外国人分散地域、集住地域の 1 年目・2 年目のデータに加え、補足的に 50 件弱の文字化データも公開している。それには、生活者としての外国人にとどまらず、一般的な日本語学校等の学習者や、日本語を母語としない大学教職員等のデータが含まれる。初級から超級まで様々な文字化データを参照することで、多様な日本語学習者の実態を把握することが期待される。

また、補足情報として、海外のデータベースづくりについての情報や、一部の音声データを公開する予定である。音声データについては、特に方言の使用等、文字化データでは伝わらない音声・音韻の情報や、テスターと学習者の相互行為の様子などを提供する。

## 4. 課題と展望

今後、このような一定量のデータを無料で公開し、言語教育や言語学、あるいは社会における諸実践等の分野に貢献するような調査研究が行なわれることが望まれる。その中において、本データベースの整備・普及にあたって見えてきた課題をいくつか紹介する。

まず、よりデータを充実化させる必要性である。長期にわたる縦断調査のデータを公開することで、より学習者の言語生活の軌跡をたどることができるだろう。また、音声データの充実化も課題であるが、それには個人情報等の問題により公開にあたる研究倫理の在り方等の付随的問題も生じてくる。ユーザーが日々の研究、実践、地域活動において、より建設的な効果を生み出せるようなデータを提供できることが一つの願いである。

また、上記に関連して、文字化の枠組みの再考やタグ情報の内容の吟味等、学習者会話データベース一般として、どこまで現実に即したデータ提供が可能かという課題である。今回のデータベースでは実現できなかったが、文字化データやタグ情報を、学術研究向けと一般（実践者・教育者）向けとの 2 通りで作成・公開するなどの方法も考えられる。なお、現在、本研究所では、本縦断調査編に加え、より横断的に大量のデータを公開する日本語学習者会話データベースも構築中である。情報量と利便性を兼ね備え、また量的分析と質的分析の両方を可能にするような、より包括的なデータ集積と公開は、福祉言語学の観点からみても大きな課題と展望になるだろう。

当日のワークショップでは、実際にウェブサイトを画面に映し出し、その構造を紹介することで、より汎用性の高い言語データベースの在り方について、会場の皆様と考えていきたい。

連絡先 麓野 智紀 [thatano@ga.kokken.go.jp](mailto:thatano@ga.kokken.go.jp)

# 「日本語会話データベース縦断調査編」における文字化について

塚原佑紀（首都大学東京大学院博士後期課程）

## 1. はじめに

本発表では「日本語会話データベース縦断調査編」における文字化について取り上げる。

まず文字化担当者の気付きをもとに「日本語会話データベース縦断調査編」の活用法を提案し、文字化の方針を示す。そして、その文字化担当者の気付きと文字化の方針が実際にどのように会話データの文字化に反映されているかについて、例を挙げながら示す。

## 2. 「日本語会話データベース縦断調査編」における文字化の方針について

「日本語会話データベース縦断調査編」に収録されている会話データには多くの興味深い点が見られるが、このデータベースはさまざまな人々に多様な研究のたたき台として使用されることを念頭においている。日本語教育学や言語学を専門とする研究者のみならず、地域において日本語教師として活動している方など多様な視点からこのデータベースが活用されることを期待している。具体的な活用方法としては以下のことが考えられる。

- 会話データの外形的側面に注目することで、地域の学習者の日本語の実態についての研究に資すること。
- 会話データ全体を見渡すことで、学習者（インフォーマント）の「語り」を含め、談話分析に資する。また、学習者の背景や生活の現状が日本語習得にどんな影響を与えているのかを考える材料を提供する。
- OPI の実際について把握できること。また、学習支援者が、レベル別の会話データを参照し、担当している学習者の日本語のレベルや習得度合いを測る目安として活用すること。同一学習者の2年間の会話データを比較・検討することで、具体的にどのような点で日本語の習得が進んだのかを分析すること。

したがって「日本語会話データベース縦断調査編」における会話データの文字化は、学習者の発話をできるだけ復元でき、この文字化資料を見た人が研究テーマを発見したり、あるいはその他の活用をするうえで「気付き」やすいように、また、多くのさまざまな人々にとっての「読みやすさ」にも配慮してある。

また、あくまでも「たたき台」としての会話データベースであると考えているので、BTS J（宇佐美まゆみ、2003）のように発話文の認定や発話文番号・ライン番号

を与える、沈黙の時間を記すなどといった定量的分析に関わるような作業は行っていない。

## 3. 「日本語会話データベース縦断調査編」における文字化の実際

ここでは文字化担当者の気付き及び文字化の方針が、具体的にどのように文字化に反映されているのかを例を挙げながら示す。

### ● 会話データの外形的側面について

学習者の音声・文法、あるいは丁寧体／普通体の使い分けなどといった会話データの外形的特徴については、日本語学習者としての特徴も見られるほか、（野山・塩谷・嶋田・簗野・山辺、2008でも言及しているが）当該地域の方言が反映していると考えられる箇所も見られる（例1）。

とくに発話者の特徴的な音声については、読みやすさを考えて音声かな表記で表した。文字化担当で発話者の意図された表現が想定できるものについては〔 〕でそれを示す（例2）。なおKYコーパスでは発話者の日本語に英語の語句が混入している（と考えられる）部分は英語で表記しているが（山内、1999）、できるだけ発話者の特徴的な音声を聞こえた通りに（かつ読みやすく）表記するために、今回の会話データでは音声カナ表記で示した（例3）。

（例1）

I： やっぱり、亡くなったの人に大切な思いさすれば、やっぱり、やらないのほうがいいと思うで、ただどね{笑}。

（例2）

I： サポートはねくうん>、やっぱり学校のほうがくふんふんふん>いて、と、先生と話してからくふん>、じゅーく〔塾〕に入れてくあー>、あと、お友だちも、ね、手伝って。

（例3）

I： あの一、なんだっけ、チキンライス〔チキンライス〕？。

T： チキンライス？。

I： ええ、はい。

### ● 学習者の談話構造を見る（会話データ全体を見渡す）

会話データの内容を見ると、短期間のうちに日本とブラジルの間を頻繁に往来しているといった学習者の背景や、子どもが通う小学校の教師とのやりと

り等、生活の状況を読み取ることができる。そのような学習者の「語り」がどのように行われるのかについて、文字化の際には、特に沈黙の現れ方や非言語行動との関連を見ることができるよう心がけた。

沈黙については、会話のどの部分で出てくるのかを示すことに重点を置いている。文節内における2拍から3秒程度の沈黙については<sup>^</sup>で表している(例4)。また、3秒以上の長い沈黙については、、、で示す(例5)。

非言語行動についてはできるだけ拾って表記するようにした。{笑} {ブレス} {咳払い} {舌打ち}などで示している(例6, 例7)。

(例4)

I: 一方的に自分の都合だ、が悪いから、もう、バサッと切る<sup>^</sup>ようなことは、ちょっと、何、なんでしょう、えーと、うん<うーん>、じゃ、うーん、弱肉強食のような<ええ、ええ>感じがします。

(例5)

T: えー、ポルトガル語と日本語の授業と、どちらがおもしろいですか？

I: 日本語のほうは、も、うーん、日本の文化はお、先生たち教えるから、えー、そ、それは楽しい<ふん>。

それ、ポルトガル語は、うーん、、、本とか<うん>、書いた人、なに考えたとか<ふーん>、そういうこと。

(例6)

T: 何か買いましたか {笑} ?。

I: いや、何も買って、買ってないです。

T: え、うん？

I: うん、何も {笑}。

(例7)

I: 街、あちこち、全部、日本語教室が<はい>あったけども、【地名1】はないですね<はい>って言ったら、そうだ<うんうんうん>、わがった、わかりました<うんうん>、今度相談して作りましょう<はい>って<はい>、言って、{ブレス}、2003年か、\*\*\*<sup>1</sup><はい>、2002年、\*\*\*。

このとき<うん>、8月に頼まれて<はい>10月に勉強始まったのよ。

#### 4. まとめ

2節では文字化担当者の気付きをもとに具体的なデータベースの活用法を提案し、文字化の方針を示した。多

様な研究の「たたき台」として使用されることが念頭においてある。学習者の発話をできるだけ復元できるように、また、専門家や研究者のみならず、さまざまな人が活用できるように、「読みやすさ」にも配慮した。

3節ではその気付きと文字化の方針が実際の文字化資料にどのように反映しているのかを例を挙げながら示した。とくに学習者の発話の音声的特徴、沈黙、非言語行動の表し方について取り上げて、具体的に例を挙げつつ文字化の実際について触れた。

会話データの文字化については、まだ検討する余地があると思う。より使い易い文字化資料にするために、当日は、データベースの活用も含めて、参加者の皆さんから忌憚のない意見をいただけたら幸いである。

#### 参考文献 (野山担当分と塚原担当分)

- 宇佐美まゆみ.(2003). 改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ). 多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究. 科学研究費補助金基盤研究(C) (2) 研究成果報告書; 平成13-14年度, pp4-21
- 徳川宗賢(1999)「ウェルフェア・リングイスティクスの出発」(対談者 J.V. ネウストプニー)『社会言語科学』第2巻第1号 pp. 89-100 社会言語科学会
- 野山・塩谷由美子・嶋田・簗野・山辺真理子(2008)「地域に定住する日本語非母語話者(外国人配偶者)の言語生活に関する縦断的研究—OPI(Oral Proficiency Interview)テストを活用した会話データを事例として」社会言語科学会第22回大会発表論文集, pp208-211
- 野山・岡部・嶋田・簗野・山辺(2009)「地域に定住する日本語非母語話者(日系ブラジル人)の言語生活に関する縦断的研究—OPI テストを活用した会話データを事例として—」社会言語科学会第23回大会発表論文集, pp. 254-257.
- 堀井 恵子(1998). 「ACTFL-OPI の手法を使った会話力向上の練習の可能性」武蔵野女子大学紀要 33 号 pp. 9-16.
- 松尾 慎(2000). 「ブラジル日系人の会話能力とその規定要因—南マットグロッソ州ドウラードス市共栄移住地におけるインタビュー調査より—」大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流 第4号. pp. 17-33
- 山内博之.(1999). OPI およびKY コーパスについて. 第2 言語としての日本語の習得に関する総合研究. 平成8年度-平成10年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(A) (1), pp238-278

連絡先 塚原佑紀 marorin@gmail.com

<sup>1</sup> \*\*\*は音声が不明瞭で聞き取れなかった部分。

# 地域に定住する日本語学習者に対する自己診断テスト作成の試み

岡部真理子（都留文科大学）

## 1. はじめに

地域に定住する日本語学習者にとっては、自分の能力、特に口頭能力の評価の機会が極めて少ない。読み書きを必要としない日本語学習者の日本語の口頭能力を評価する方法として、OPIは大きな可能性を持っていると考えられる。しかし、地域の日本語学習者あるいはその支援者の間でのOPIの認知度、そしてOPIの実用性やアクセスのしやすさを考えると、自分の口頭能力がどの程度なのか知りたくても、OPIというテストの存在自体を知らない、あるいは、知っているもどうすればOPIを受けられるのか分からないというのが実情ではないだろうか。

ここでは、OPIを受けることが困難である地域の日本語学習者のために、OPIの評価尺度を使用した日本語能力の自己診断テストを提供できないかということから始めた取り組みを紹介する。

## 2. 自己診断テスト作成の背景

OPIを活用した縦断調査のなかで、OPIを受けることにより学習者にさまざまな変化が起こるケースが確認された。これはOPIのインタビューという形式やテストの方法からの影響も大きいと考えられるが、自己の能力の評価、そして適切なフィードバックが学習者の意識の変化に大きな役割を果たしているのではないだろうか。この縦断調査の協力者である日本語学習者は、調査期間中2回OPIを受ける機会があったが、地域の日本語学習者がすべてそのような状況にあるわけではなく、特に口頭能力について他者から客観的な評価を受ける機会も少ないと言っている。

そのような状況にある学習者に、自分なりに自分を把握できる簡単で実用性の高い評価の方法として、自己評価を取り入れられないかと考えた。Genesee & Upshur (1996)は、教師が行う評価がクラスの中での学習に限られたものであるのに対し、学習者は目標言語を使用するあらゆる場面での自分の言語行動をモニターすることができ、そこから得られた自己の言語行動についての情報を自己評価に活用できると述べている。生活のさまざまな場面で日本語を使っている学習者にとって、何ができるのか、また何ができないのかを一番よく知っているのは学習者自身に他ならないということである。

自己評価は、目的によっては最も効果的な評価の方法であるとは言えないが、評価の機会の少ない日本語学習者が、自分なりのそれまでの学習の効果の評価や学習意欲の維持

のために使用するツールとしては、大きな可能性を秘めているのではないかと考えられる。ただし、今回作成した自己診断テストが、OPIやその他のテストに代わるものでも、またある種の資格を与えたり、レベルを保障したりするものでもなく、あくまで地域に定住する学習者が自分の能力を大まかに把握し、今後の学習につなげていく目的のために作成したものであることを強調しておきたい。

## 3. 自己評価の方法

### 3.1 先行研究

自己評価では、学習者が自分の能力に対して実際よりも肯定的な評価をする傾向がある (Heilenman 1990) ことや、文法の正確さについては的確な自己評価を行えない可能性 (von Elek 1985)、実施の方法や記述のしかたに結果が左右される可能性 (Bachman & Palmer 1989, Heilenman 1990) などが指摘されている。しかし、これまでに教師の評価と自己評価との相関から自己評価を検証する形の研究が多く行われており、学習者はある程度正確に自分の能力を評価できることが期待できることが報告されている (Falchikov & Boud 1989)。また、LeBlanc & Painchaud (1985) のように、自己評価を外国語教育のプレイスメントに活用できる可能性も報告されている。

### 3.2 自己診断テストの作成

今回作成した自己診断テストは2つのセクションに分かれている。セクション1は、学習者の大まかなレベルを想定するためのもので、学習者は、自己の日本語能力が11のレベルのどこに位置するかを選ぶ。セクション2では、セクション1で学習者が選択したレベル及びその隣接レベルに対応する質問により、より詳しく日本語のレベルをみていくもので、学習者は20の質問に答える。長時間にわたる協力が得られにくい地域の学習者の状況を考慮し、質問数を絞り込み、少ない質問数で必要最低レベルの情報を得ることを主眼とした。以下にそれぞれのセクションについて詳しく説明する。

#### (1) セクション1：全体についての質問

形式は、Oskarsson (1980) が自己評価のモデルとして提示しているもののひとつを使用し、内容はOPIの評価基準に沿ったものに改定した。0から10までの11のレベルそれぞれに日本語能力の主に機能、タスク、テキストの型を中心とした記述をつけた。0は日本語がまったく話せないレベル、1～3は初級の下・中・上、4～6は中級の下・

中・上, 7~9は上級の下・中・上, 10は超級にそれぞれ対応する。この11レベルの他に、語彙力に関する質問をひとつ加え、セクション1全体で1ページの質問表とした。

## (2) セクション2：レベル別の質問

セクション2は、3種類の異なったレベルの質問表から、セクション1で想定されたレベルに対応するものを選び、1ページの質問表に記入するものである。セクション1の結果が0~3（ゼロレベル、初級レベル）の場合は、セクション2では初級・中級レベルの質問を、4~6（中級レベル）の場合には初級・中級・上級レベルの質問を、7~10（上級・超級レベル）の場合には、中級・上級・超級レベルの質問を準備した。

質問は、20の言語行動について、それぞれ5段階で答えてもらう形式である。Bachman & Palmer (1989) の「できる・できない」を聞く形式よりも難しさを聞く形式のほうが自己評価では効果的であるという研究結果から、地域に定住する日本語学習者に身近な言語活動を取り上げ、それぞれの行為についてどれだけ難しいと感じるか（「まったくできない」「とても難しい」「なんとかできるが少し難しい」「あまり難しくない」「簡単にできる」の5段階）を聞く形式とした。

質問数は、質問表A~Cに共通の中級レベルのものが若干多く入っているが、できるだけレベル間でバランスがとれるように配慮し、ランダムに配置した。セクション2の各レベルの質問例をあげる。

### 初級

- ・時間や曜日、日にちなどを述べる。
- ・好きかきらいかを述べる。
- ・昨日あったこと、したことについて説明する。

### 中級

- ・映画やドラマなどのあらすじを説明する。
- ・かんたんな意見を述べる。
- ・交通事故にあうなどの緊急時に、助けを求めたり、適切に対処したりする。

### 上級

- ・借りた本をなくしたり、大切な約束を忘れていたりといった状況で、日本語で適切に対処する。
- ・事故や犯罪の証人として警察に状況を詳しく説明する。
- ・自分に直接関係があったり、特に関心があったりする社会問題について、説明したり意見を述べたりする。

### 超級

- ・地域の住民の代表として、市町村長・県知事に意見や要望を伝え、交渉する。
- ・自分が住んでいる地域のルールをよくないところを変えるように、地域の人たちを説得する。

最終的なレベル判定は、セクション1の回答及びセクション2の各レベルの質問にどのように回答しているかを総合的に判断し、決定する。

## 4. パイロット調査

2008年9月に、予備調査として現在の自己診断テストのパイロット版を4名に試行した。この段階では、日本語版のみで、口頭で質問して答えてもらうかたちでの調査であった。セクション1の記述をよりOPIの基準に沿ったものにする、OPIの評価と食い違いが大きい項目を差し替える等の改定を行い、2009年8月から9月にかけて、再度予備調査を行う予定である。調査の結果は口頭で発表する。

## 5. 自己診断テストの限界と今後の課題

今後自己診断テストの各国語版の作成を予定している。自己診断テストの結果は、データベースの情報の一部として公開する予定である。

自己診断テストは、実際のOPIのように下位レベルまで厳密に評価できるものではなく、あくまで目安として使用するべきものとして作成した。OPIの縦断調査では1年でレベルアップしている例が見られたが、それほど厳密に変化を評価できるものではない。また、OPIのテスターとのやりとりの中で学習者が感じる達成感や、学習者に起こる気づきや動機を高めるといった効果は期待できない。

テスターが学習者の置かれた学習状況や生活状況に臨機応変に対応できるOPIと異なり、あらかじめ準備された質問表に答える形式での自己評価では、ひとつの質問表で高校生、配偶者、就労者などの立場の違いによって生じる話題や言語活動のバリエーションすべてに対応することは難しい。今後、各質問項目の信頼性・妥当性を検討するとともに、地域に定住する日本語学習者を対象とした自己評価表の中でどのようにバリエーションに対応していくかを検討していきたい。また、自己評価を行った後、どのように学習者へフィードバックを行い、その後の日本語学習につなげていくかをこれからの課題として考えていきたい。

### 参考文献

- Bachman, L. F. & A. S. Palmer (1989) "The construct validation of self-ratings of communicative language ability." *Language Testing*, Vol. 6, No. 1.
- Falchikov, N & D. Boud (1989) "Student self-assessment in higher education: a meta-analysis." *Review of Educational Research* 59, 4.
- Genesee, F. & J. A. Upshur (1996) *Classroom-Based Evaluation in Second Language Evaluation*. Cambridge University Press.
- Heilenman, L. K. (1990) "Self-assessment of second language ability: the role of response effects." *Language Testing* Vol. 7, No. 2.
- LeBlanc, R & G. Painchaud (1985) "Self-assessment as a second language placement instrument." *TESOL Quarterly* 19, 4
- Oskarsson, M. (1980) *Approaches to Self-Assessment in Foreign Language Learning*. Pergamon Press.
- von Elek, T. (1985) "A test of Swedish as a second language: an experiment in self-assessment." Y. P., et al (eds). *New Directions in Language Testing*. Pergamon Press

連絡先 岡部真理子 bxt02605@nifty.com